
ありがとう

神滅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがとう

【Nコード】

N69320

【作者名】

神滅

【あらすじ】

注意！

この内容は凄く暗いです。
そう言うのが苦手な人は今すぐ戻ってください。
鬱になったて自分は知りません。

後、小説とはいえないものかもしれませんがその辺は目をつぶってください。

ただ、俺は自分の感情を文字にただけなので。

(前書き)

暗い内容です。苦手なら本当に戻ってくださいね

俺は正しく生きてきたなんて思っていない。
ただ、俺は少しでも人の為にと思った。

小学生の頃、横断歩道を渡っていたとき、突然車が来たことがあった。

横にいた俺の友は俺を突き飛ばし俺を守った。

かわりに車は友の足をタイヤでひいた。

その友達は足を痛めて動けなくなった。

未だに歩けない。

その友達の行為がすばらしかった。自分を犠牲に俺を残した。

友を認める者は多かったが……。俺は他の友達から責められる。

「どうして、横断歩道を渡ったのか。どうしてお前があいつを助
けなかったのか」

「なぜ、お前が犠牲にならなかったのか」

犠牲になった友は勉強もでき、運動もそこそこできて友達思いの立
派な人間だった。

それに比べて俺は、泣き虫で何もできない。勉強も運動も……。

いじめがおこるようになった。

俺は負けなかつたいくら少数でも自分が正しいと信じ、少ない仲間
で正しいと言い続けた。

結果、いじめはなくなった。

勝ったのだ。

後に中学校で現実を知った。泣き虫である俺は再びいじめの対処に
される。

小学のように団結すればいじめはなくなると思っていた。

そんな物は、ただの幻想だった。

現実には甘くない。現実はずらい物だ。

いじめをなくそうとする俺は孤立し、同じ小学校の奴の陰口により、俺のせいで動けなくなつた者がいると言うことも学校中に広まつた。俺はただ、あいつに救われて、誰かの為になりたい。争いをなくしたいと思つただけだった。

蹴る殴るなどのいじめがあつても俺は学校に行き続けた。

なぜなら、俺は間違つていないからだ。

ついに俺は孤立した。学校に行き、特に勉強に励むわけでもなく、休み時間人と話すわけでもない。

しかし、俺は学校には行き続けた。自分は間違つていないと信じ、やがて、卒業し高校に入学もした。それまでの心の傷はいえてなどいないが。

高校では目立つこともせずただ授業を受けた。

学校に行く最中、細い道で1台の車が俺の前を走っていた。

俺は止まってくれろと思ひそのまま歩いた。

そのとき

「どけるや！」

車の運転手が怒鳴つた。

「ひかれないのか！」

俺は恐ろしくなり道路の端に避けた。

車は俺の横を通過するさい。俺の横に止まり。

「注意してくれてありがとうございますだろ？ガキ」

運転手は俺にそんなことを言った。

俺は怒り言つてやった。

「お前が止まれば良いんだろ。くず」

言つた後に顔を殴られた。

「糞ガキが！」

そう言つて車は通り去つた。

泣き虫な俺はそれだけで泣いた。
学校についたときには泣き止み普段と同じすごし方をした。
授業中考えていたことがあった。
ありがとうとはなんだろう…。
この世界の正しいとはなんなんだろう…。
小学校のあの時。俺じゃなく友がひかれずにいた方が良かったんじやないだろうか。
だんだん苦しくもなった。

学校は普段と同じ時間に終わり下校中。俺は電車に乗って目的の駅に着くのを椅子に座って待った。
途中、杖をついたおばあさんが電車に乗ってきた。

俺はもうじき自分の降りる場所つと云うこともあり立ち上がり、
「おばあさん。この席どうぞ…」
おばあさんのところにいって席をどうぞつと云うだけの間に他の人が俺が座っていた席に座っていた。
俺は啞然とした。杖を突いている人が入るのにどうどうと席を取るなんて。

「おい、避けてあげろよ」
俺がいた席に座った奴に言った。

「はあ？席なんて早い者勝ちだろ？」

「お前…」
怒りそいつを殴りそうになった時

「いいんだよ」
後ろにおばあさんが言った。

「気持ちだけで良いんだ。ありがとう」

何があるがとうなのだ？

感謝されることなのか？

こんなことがあってもいいのか？

自分に問う疑問。

答えられることなどではしなかった。

俺はこんな感謝をされるために席を空けたんじゃない…！

俺の友は立派だった。

多分、小学校の時、歩けなくなって入なければもつと立派な人間になっただろう。

なのに、俺はなんだ？友に助けられたに何もできない。何の力もない。

感謝されるようなことはなく、認められることもなかった。

ありがとう。その感謝の言葉が欲しかったわけでもないが。

ただ、助けられた自分だからこそ、誰かの為になりたいと思っただけなのに…。

(後書き)

これは、全くリアルでは関係ない話です。

作り話なのであまり深く考えずにいてください。

内容としては、ありがとうとは何なんだろうという感じに作った物
です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6932o/>

ありがとう

2010年11月3日23時05分発行